

CONTENTS

文化の交差点 青木 保・文化庁長官対談 第21回 ゲスト 小淵優子さん●内閣府特命担当大臣

未来を見据え、世界に羽ばたく	4
長宮コラム 青木保のカフェ・アオキ	8

特集 平成 21 年度の文化行政の重点的な取組

施策紹介

平成21年度の文化庁重点施策 14

連載

鑑 文化芸術へのいざない 1	日本の伝統美と技を守る人々 重要無形文化財保持者編 29
仙像の材料32	金春惣一（金春惣右衛門）（能囃子方太鼓）36
いきいきミュージアム 美術館・博物館事業レポート 85	文化交流使の活動報告 53
財団法人安部紫四郎記念館（島根県）34	茶味心交（茶道家／千 宗屋）37
こどもの文化体験 25	伝建地区を見守る人々 伝建歳時記 61
新鮮な反応に触れるよろこび（スターダンサーズ・バレエ団）…35	伝統的建物と竹が織りなす町並み（広島県竹原市）38

今月の表紙

さくらとメジロ
撮影：岩崎 明

イベント案内● 40

新国立劇場スポットライト●45

5月の国立劇場● 46

藝術文化振興基金ニュース ● 47



未来を見据え、 世界に羽ばたく

青木 今回は小淵優子大臣にお越しいただきました。せっかくのカフェでのお話ですからさくばらんいろいろとお話かがいしたいと思います。最初に失礼ですが、小淵大臣はお子さんはいらつしやるのですか。

小淵 はい。今一歳五か月です。

青木 毎朝保育園にお子さんを預けられて、それで国会にいらつしやるのでしょうか。

小淵 そうです。

青木 それでお仕事が終わったら引き取られて。

小淵 そうですね。ただ、時間によるのですが、あまりにも私が朝早いときは主人に頼むこともあります。

青木 ああ、ご主人に。男女共同参画ですね(笑)。それは(笑)。

政治家になつたきつかけ

青木 お父様の総理(小淵恵三元首相)が急に亡くなられて、小淵元首相は芸術や文化にもたいへん関心の高い方でしたので、私個人としても非常に残念だったんですが、小淵大臣はなぜ政治家になろうと決意されたのでしょうか。

小淵 私は父が総理のときに秘書をやっていたのですが、平成一二年の夏に日本がホスト国になって沖縄でサミットが開かれるとき、父に「サミットが日本で行われるまでに必ず日本に戻ってくるから、一回海外を見せてほしい」と言っていて、イギリスに留学をしていたんです。そして三か月したところで、父が倒れたから帰ってくるようにと連絡があったんです。それで帰りの飛行機の中で日本の新聞を手にして、その時に初めて父がもう昏睡状態であるということと、あと、「跡を継ぐのは優子さんか」とかいう新聞記事を見まして、そのとき「ああ、私の名前が出るんだ」ということを知ったんですよ。うちは三人兄弟で、私は末っ子で、三番目の私になぜ声がかかるのかということもありました。まあたま秘書をやっていたので、声がかかったのかなと思つたんですが、それで日本に帰ってから一か月ちょっと、父の看病をしながらいろいろと考えて、家族に相談してもなかなか決められず、一か月間ずっと父の若いころの資料を読んだり、女性議員の先生の書いたものを読んだりしながら、いろいろ考えた末、やはり父

が政治の世界でがんばってきたものを誰かが引き継がなければならぬと思つて、政治家になることを決めました。

青木 選挙はどうでしたか。ずっとお父様の選挙を見られていたりしても、それでもやはり自分が出るとなると別でしょう。

小淵 そうですね。ずいぶん小さいころからなじんでいたんで、選挙自体にはそんなに違和感はなかったのですが、やはり候補者が自分となると全然違うんですよ。すごくうれしなと思つたのが、私が選挙に出ること、これまで選挙とは全然関係なかった若い人たちがどんどん応援に出てきてくれたことです。

青木 若い人のあいだで、政治に対する意識が高まるのはすばらしいことだと思います。

小淵 それが私にとってもすごく力になりました。

青木 それで当選されて、その後は文部科学省の政務官、そしてあつという間に大臣に。

これから日本を背負っていただかなくてはいいから、文化にもご理解がある大臣がますます偉くなられるのはわ

青木 例えば今、多くの女性が仕事をもっていますね。そうすると、なかなか自分の子どもをもとうとしないし、おっしやったように、お子さんをもつと職場からもリタイアしないといけないこともある。私の教え子が博士号を取ったので



性研究者の方といると意見交換をしたのですが、素人の私には全然わからないような話を夢中になってお話しされるんですよ。そういうふうには研究者として目を輝かせて語る姿を見ると本当に感動しました。ただやっぱり心配しているのが、これから結婚をして、出産ができるのかどうか、そこで自分のキャリアが止まってしまうことをどうしたら良いのだろうかということ。そういう方にとしたら、キャリアか子どもか、どちらかを取るしかないんですよ。そんな世の中はおかしいと思います。外国では、子どもを育てながらも、研究者としてがんばるのですから。

それから、結婚しない人が増えてきているという問題があつて、未婚、晩婚が少子化を招いている一因だというのははっきりと言えると思うんですね。いかにそこを解決していくかということを考えると、その前段階を見ることが重要だと思うんです。若い人たちが結婚できる状態にない。それには、若い人たちの雇用が昔に比べて厳しいという要因がある。そういうことを考えると、少子化問題というのは、未婚、晩婚というものを

すが、ちょうど最後の論文審査のときは臨月に近かつたんですね。面接の時、ひやひやしましたけど。生まれちゃったかどうかしようかと(笑)。その後お子さんをお産みになったら、せっかく論文を書いて、大学に就職も決まっていたんですが、結局子育てに全部時間が取られる。お子さんをもつだけで男性と比べると大きな差ができてしまうんですね。これではだめだと思いましたね。

小淵 そうですね。ちょうど女性が子どもを産む時期、二〇代後半から三〇代の女性というのは働きざかりなんです。女

おぶち・ゆうこ 群馬県出身。昭和48年生まれ。成城大学を卒業し、テレビ会社に入社後、父小淵恵三首相(当時)の私設秘書となる。平成12年、小淵首相の急逝にともない、衆議院議員選挙に出馬し初当選(現在3期目)。平成18年、安倍晋三内閣(当時)で文部科学大臣政務官に就任。平成19年に第1子誕生。子育てをしながら議員活動にいそしむ。平成20年には、麻生太郎内閣の下で戦後最年少の入閣となる内閣府特命担当大臣(少子化対策、男女共同参画)に就任。また、平成21年には第2子の懷妊を発表。



内閣府特命担当大臣の仕事について

青木 内閣府特命担当大臣として、少子化や男女共同参画を担当されているほかに、食育などについても担当されていますが。

小淵 それから公文書管理。また、このあいだ担当の指示をいただいたのが定住外国人の支援についてです。

青木 日本の公文書の管理ってむずかしいですね。学者も一般の人たちも大きな関心を抱いています。どこに保管して、それを開かれたかたちで社会に伝えていくことも大きなお仕事だと思えますね。過去の文書がきちんと保存管理されていないと日本の歴史も社会も政治や経済も後世

に伝わりません。

小淵 だからもう少しPRして、いろいろな人にその大切さをわかってもらえるとう良いと思います。

青木 公文書というと、イギリスがアメリカやアジアなど、かつて植民地統治した地域についての公文書館がロンドンにあつて、全部保管されています。私は昔スリランカの中央高原のある町を实地調査研究していたのですが、その街の一〇〇年間の統治記録の公文書が全部ファイルされていて見せてくれる。さらに必要などころを言いますとコピーして、日本の大学まで送ってくれました。ああいう内外の関係者に対する公文書館のサービスというのはやはりたいへん重要だと思っていますね。

これからアジアの人々も日本のことを調べるときに国立公文書館に必ず来ると思いますので、これは日本という国の未来にかかわる大きなお仕事だと思っています。

それで少子化対策についてですが、大臣にとって、今どんなことが一番関心のあることがらでしょうか。

小淵 まだ日本は、子どもを生んで育て

どうとらえるか、加えて、その前段階の、若い人たちの雇用をどう考えるか、そのあたりまでフィードバックしないと、解決していかないのではないかと思います。社会全体の問題なので、さきほど私は、子どもにかかわる人たちだけの問題ではないと申し上げたんです。

青木 アメリカなどではベビーシッターのような制度が非常にしつかりしていますから、結構安心して女性も仕事ができる。ベビーシッターの充実はむしろいいでしょうか。

小淵 そうですね。今は保育所の整備をいかに進めるかのほうが先にきている状態でしょうか。ですが、もともと女性の力を社会で活かすためには、そのあたりがきちんと整って、研究もしたくて子どもももちたいという希望があれば、それがかなえられる国でないとだめだと思います。

青木 フランスはかなり深刻な少子化問題に悩んでいたのですが、複数子どもをもてば国が援助するなど、国としてもたいへんなバックアップ体制を敷いて、大々的に取り組ましましたね。それが成功して少子化に歯止めがかかったそうで

す。

少子化の場合は、忙しく仕事をしている人たちは男性も女性も子どもをもちたがらない傾向はやはりあるでしょう。残念なことに、あるいは母親が子どもを殺したり、娘が父親を殺したりとかそういう悲惨な事件もよく起こっています。そういう事件についてはどういふふうに思われますか。

小淵 いろいろなニュースを見ていると、本当に毎日のようにあるような気がして、ぞっとします。信頼関係や絆が築かれるべき関係のあいだで、そういう悲惨な事件が起こってしまうのかというところで、そうなる前に、誰かがどこかの段階で手を差し伸べられなかったのかなということは強く思います。

青木 家族が集団としてむしろしくなってきたのは事実だと思います。それから「子はかすがい」といって、子どもがいれば、例えば夫婦の仲がそんなにうまくいかなくてもやっていけるところがあったんですけど、今家族という意識も薄くなってきた気がします。少子化とか、男女共同参画とかいいうと、そういう問題も絡んで、日本社会全体の動きの中

で見えないといけないと思います。

小淵 男女共同参画についても少子化についても、これまではどちらかというと、女性をどう守るかとか、女性がどう生きていくかということを中心に話されてきました。でも、今、長官がおっしゃったように、やはり家族の問題でもあるわけだから、少子化や男女共同参画について考えるときに、女性のことはもちろん言っているのとおかしな話なんですよ。なので、最近は少子化のことも、男女共同参画のことも、男性を含めた皆さんで考えてくださいと言っています。少子化の一つの柱として、男性も含めた働き方の見直しをして、育児や家事に、男性も参加をしてくださいということを強く言っています。

いろいろなところでお話しているのですが、女性の生き方は、すごく変わって、勉強もするようになったし、働くようになったし、子どもの世話をしながらさらに働くようになった。その一方で、男性の生き方が変わらなくて、ずっと長時間勤務でがんばって働いているというのが今の在り方です。だけど生き方が変わって、男性でも家事にかかわりた

い人や育児にかかわりたい人もたくさんいるわけですから、そういうことをやりたい人ができる環境をつくらなければいけないのではないかと考えて、それで男性も含めた働き方の見直しが必要だと言っています。

青木 確かにそういう環境的な問題とか、また、慣行もあります。そういうものをだんだん変えていかなければいけないということですね。

小淵 そうですね。日本も、今は核家族が多いですし、一人で子どもを育てるお母さんもいますし、いろいろな家庭のいろいろな事情があって、家族の形はすごく多様化しています。それに環境や社会などがきちんと追いついていければ良いと思います。決して家族はこういうかたちであらねばならないという理想があるわけではなくて、みなさんが満足で幸せであればそれで良いので、何とかみなさんの要望に追いついていければ良いなということですね。

青木 とところで、食育についてはどういったことをされるのですか。

小淵 日本の食文化というのはすばらしいと思うんです。食は文化ですよ。特に



移動祝祭カフェ

ヘミングウェイの「移動祝祭日」は、若き作家のバリでの文学修業時代についての自伝的回顧的な作品だが、数ある文豪の作品の中でも好きなものだ。今度、新訳が出た機会にまた読んだ。（高見宏訳、新潮文庫）もし幸運にも、若者の頃、パリで暮らすことができたなら、その後の人生をどこですごそうとも、パリはついでくる。パリは移動祝祭日だから」というエピソードを巻頭に掲げたこの、ヘミングウェイの遺作は若き作家の生活と交友、文学観、パリについての鋭くてすばらしい叙述、アナリス・ニンやシルヴィア・ビーチ、スコット・フィッツジェラルドとゼルダなどの登場人物などで文学史的にも興味があるが、いま読み直して感じるのはいはりパリという都市の魅力である。最初の章でヘミングウェイがひとりカフェで原稿を書いているところがあるが、「サン・ミッシェル広場の気持のいいカフェ」、私自身これまで

いくどもパリに行っていて残っている思い出といえは何といても毎日朝から深夜まで仕事の合間を縫ってくつろいだカフェのことである。一人で本を読んだり、物書きをしたり、友人と語り合ったり、すべてがカフェを中心にならわってゆく。世界の多くの都市を訪ねたが、パリで一度滞在の日々を送ると、カフェがあなたの生涯ついてくる、といえはよいだろう。それにこの本の中に貧しいヘミングウェイが昼食抜きで我慢するところが出てくるが、空腹を抱えてパリの街を歩くのはつらい。嫌でも食べ物が目に入り、その匂いに満ちているからだ。そこで彼は食べ物の匂いの漂わないリエクサンブル公園の中の美術館に入る。「腹がからつぽで空腹のきわみにあると、どの絵もシャープに、鮮明に、より美しく見えた。セザンヌを深く理解し、彼が風景画の傑作を描いた秘訣を真に把握することができたのも、私の空腹のときだった」

「移動祝祭日」を久しぶりに読み返して、やはり人間の生活と文化芸術の結びつき、都市の魅力に改めて思いをはせた。カフェという空間と時間、そして空腹と芸術との関係。不況のときこそ文化芸術の存在の意味がよく理解できる面もあるのではないか。こじつけはしまいと思いつつも、ひとつのこと。

子どもについては、食育の時間を利用して、食べるものや、季節感などを教えていって、そうしたものを大切にしていこうと、豊かな人間性を育てていくというようなことをします。

青木 例えば中国の餃子問題とか。また食料そのものの安全性という問題もあって、飲料品などに何か有害な物質が入った可能性があると報道されると、よく担当者が「人体には関係ありません」と言います。でもそれは、確かに今日、明日には影響はないでしょうが、一〇年後に出るのかはまったくわからないことです。

小淵 そうですね。私は群馬県出身なんです。群馬県では野菜をたくさん作っています。それで、農家のお母さん方が自分たちの作った野菜を使って、簡単なお惣菜を作るお店を開いたんです。最初は「なんでそんなことやりだしたんだ」と言われたんですが、その店が今流行っているんです。やはり働く若い女性が増えてきたので、自分では料理ができないけれども、子どもには安心なものを食べさせたいということなんです。必ず地元のものを使っているの、誰が作っているのかも大体わかるし、それを



誰が加工しているのかももちろんわかるということですね。

だから、ファーストフードなど、便利なものを利用していると、私自身も助かることがありますし、良いこともたくさんあるんですが、やっぱり最終的にはそういうところに戻っていくのかなという気がしますね。

青木 もう一つは定住外国人支援について、これは総理も、日系外国人の方をどう処遇したら良いかと発言されています。

ですが、これも日本にとって大きな問題です。

小淵 もちろん雇用をどうするかというのも一つの大きな問題点なんです。親御さんがお仕事を辞めさせられてしまったことによって、子どもが外国人学校をやめることになってしまつて、だからといって公立の学校に行こうとしても言葉ができないから行けない。そのあたりが一番問題なんです。

親御さんたちも、ゆくゆくはやはり母国に帰りたいと思っている方が多く、日本の教育を一旦受けさせることに対して抵抗感があったりもするので、そのあたりがむずかしい。いろいろな要求があるので、どれだけきめ細やかに応えていけるかが課題とっております。

文化庁でも、お母さんといっしょに日本語を学ぼうというのをやっていたಿದೆいますね。

青木 そういうかたちのほうが自然で良いですね。どういうかたちであつても私は日本の社会の中に溶け込もうと努力をしながら生活をしていく、仕事をしていくということができる方向をしっかりとさせるのが大事だと思います。調和型の

日本型のモデルというのができれば。
小淵 最終的にはそうなると思います。

ね。今は経済が厳しい状況なので、緊急的な支援策をとっていますが、長期的には、外国の方でも不自由なく、安心して暮らせる環境やまちがつくられることが理想です。

青木 平成二〇年一〇月に観光庁ができ、日本を一大観光立国にということを中心張られています。その場合もやはり外国人が来て、日本で滞在したりいろんなところに行ったりするために、受入対策というのが非常に重要なのだと思います。そういうときに、いろいろなところから来ている外国人が日本で幸せに生活していれば、外国から見てもすばらしい国だということになると思うのですが。

小淵 この国にそういう異文化を受け入れる土壌ができるのは、まだもう少し時間がかかるかなという気もありませんか。

青木 時間がかかるとは思いますから、ある程度先を見通しながら手を打っていないとだめだと思えます。ぜひ中長期的な政策でお願いしたいと思います。

日本の文化、日本の技術

青木 文化のことをお聞きしたいんですが、子どもの文化体験というのを文化庁では重視していて、例えば博物館、美術館に子どもや生徒を呼んで鑑賞してもらったりいろいろやってきているわけですが、大臣から見ると芸術体験、子どもと文化芸術の関係はどうでしょうか。

小淵 これはいろいろと言いたいことがあります。自分が子どものころのこと



を考えると、やっぱり、何かのきっかけがないと文化に触れ合うチャンスというのはないですね。たまたま私の学校では、年に一回音楽を演奏してくれる人たちが来てくれて、そういうところで音楽がすごく好きになったりとか、後は私の母がお芝居が好きで、子どものころからよくお芝居に連れて行ってくれたりと、そういう機会がたまたまあったので、文化に親しむことができました。やっぱり子どもがみずから、(美術館に行こう)とかなかなか思わないですよ。だから、子どもにそういうものが決して敷居の高いところではなくて、もっと(気軽に)行けるようなんだよ)というきっかけづくりを、学校や親を通じて、またさまざまな機会を利用してやっていければ良いと思います。海外の美術館なんか行くと、本当に学生がたくさんいますよ。

青木 特によく見られる光景に、小中学校の生徒がいっぱい来ていて、車座になって、先生が説明したりしていますね。日本はまだまだそういうのが少ない。

小淵 日本は良い美術館や博物館がある

小淵大臣のこれから

青木 今政治家として、大臣という立場として、どういうことを一番日本の社会のために、あるいは日本もその一員である国際社会のためにやっていきたいとお

小淵 技術は一回失われてしまうともう戻らないものだからね。
青木 技術は本当にそれぞれ時間をかけて伝授していかなければいけないものだから、最初はなかなか本格的な作業は親方がさせてくれるのではなく、下作業ばかりすることになります。それで、脱落していく人たちも多い。今のインターネット時代では万事速く早くというのがスローガンになっていますからね。

小淵 技術は一回失われてしまつともう戻らないものだからね。
青木 技術は本当にそれぞれ時間をかけて伝授していかなければいけないものだから、最初はなかなか本格的な作業は親方がさせてくれるのではなく、下作業ばかりすることになります。それで、脱落していく人たちも多い。今のインターネット時代では万事速く早くというのがスローガンになっていますからね。



本日は非常に有意義なお話をお聞かせいただきましてありがとうございます。こうして皆様といっしょに近くでお話をうかがうと本当に小淵さんは魅力的な方で、未来の日本の政治にも希望がもてる気がします。今後ますますのご活躍を祈っております。

(一)

わりに、みんな大人になるまでそういうところに縁遠かったりするんですね。だからなんとか子どものうちからそういうところに親しめるようにしていただけると良いかなと思います。

青木 一流の演奏家などが、小学校などを訪れて、それで生の演奏を実際に聴かせるというのも非常に重要だと思います。

小淵 後は、小さい子がいると、なかなか美術館や博物館は行きづらいますよ。子どもが騒ぐということもあります。ただ、お散歩コースとしてはすごく良いところですよ。なので、例えば、〈今日はお母さんと子どもに公開をします〉という日が月に一回でもあると、お散歩コースとしてベビーカーを持って子どもを連れて行けるかなという気がするんです。

青木 そういう日をちゃんとつくって、子どもを連れて、ベビーカーでも十分入れますよと、そういうふうにもつていかなくてはいけないということでしょう。

今、確かに経済危機なんですけど、こういうときにこそ文化をもっと盛り上げ

て、文化芸術で人の気持ちを豊かにして、またなごやかにして、とかく悲惨な事件が起こりやすい面もつ社会の中で、人々の中で、文化がせつば詰まった心を鎮めるような役割を果たせないかと思うんです。

小淵 そうですね。私も文化の大切さというものは、ずっと感じていて、政務官のときにも何ができるのかなということをいろいろと考えていたんですが、どうしても文化の話というのは、経済が厳しいときにはあんまり話題にされないんですよ。それで、少しゆとりがあると文化に目が行くんですが、逆じゃないかなという気がします。

青木 あまりお金があるとはかの娯楽に使って、博物館に行ったり、美術館に行ったり、音楽をまともに聴くとか、あまりしなくなるかもしれない(笑)。逆にたいへんなときは、音楽一つ聴いても非常に体に染みこむような体験をもつことができます。戦後、物がないうときでも、たまに良い音楽に接しますと、何か〈明日もまた生きよう〉という気持ちが湧いてきたこともあった。映画でも「戦場のピアノリスト」など、戦火で破壊され

た建物の中で壊れたピアノが鳴っている、敵も味方もなくて、いっしょに聴いて、一時的であれ互いに認め合うかもしれない。文化芸術には人間の心を解きほぐす作用があると思います。だから今こそむしろ文化芸術振興を本気になってやるべきだと思います。

小淵 外から日本に来てくださいという、日本の魅力を最大限PRするにも文化だと思います。

また、伊勢神宮で式年遷宮がありますよね。ああいう技術がずっとこの国に残っていくというのはすごいことだと思うんです。やっぱり日本というこのすばらしい国に生まれた皆さんには、いろいろな日本の文化にもっと慣れ親しんでいただいてもいいですね。

青木 日本の文化には世界のほかにはないまったく独自のものがあります。このあいだ伊勢神宮にお参りしまして、それで内宮、外宮に参りました。平成二五年の式年遷宮のための材木を加工している作業場があつて、そこも見せていただいたのですが、八万本くらいの材木を全部切り出して、それを削って、お宮の建て替えに用いるのですが、こんな手間暇も

考えになっていられるでしょうか。
小淵 これから生まれてくる子どもたちや今の若い人たちがこの国を担っていくわけですから、その人たちが十分にそれぞれの能力を生かして、のびのびと活躍できるような環境をしつかりつくらなければならぬと思います。この国にはまだ何となく閉塞感があつたり、私たち若手世代がこの国を担うんだというエネルギーが不足している気がするんです。

私たちは父母やその上の世代からいろいろな豊かなものを引き継いできたと思うので、それを次の世代につなげていくことが、若くして政治家をやっている責任だと思っています。そして、日本のすばらしさとか良さだとかいうものを日本人に住む人たちがもっと十分に理解し、そのことに対して誇りをもつたうえで世界に羽ばたいていけると良いと思います。

青木 日本は文化も含めて、世界に誇るものがたくさんあるし、いろいろな問題や事件が起こるとはいってもまだまだ社会そのものが安定して、しかも安全でしょう。こういう住み心地の良さというのは、どこにもあるものでは決してない。文化芸術振興の問題も含めて大臣には安定した安全な国、社会として日本をますます発展させていただくようがんばっていただきたいと思っています。

◆長官鼎談◆
 「文化の交差点」 青木保文化庁長官鼎談
 猪木武徳 国際日本文化研究センター所長
 佐伯啓思 京都金王寺院教授
 「長官コラム 青木保のカフェ・アオキ」

◆特集◆
文化芸術創造都市

【省識者提言】
 世界的な文化芸術創造都市の潮流
 【事例紹介】
 イギリスの事例
 韓国・光州の事例
 仙台市の事例
 香川県直島町の事例
 【施策紹介】
 長官表彰（創造都市部門）
 【報告】
 シンポジウム「創造性をはぐくむ都市へ」

◆文化庁ニュース◆
 インターナショナル・ショーケース
 イベントレポート「匠に託された技」

編集後記

「文化庁月報」は、文化行政の唯一の広報誌であり、広く国民に対して文化行政への理解・関心の向上を図るため、これまで文化行政に関する特集記事、連載コラム、各種イベントや国立文化施設の催し、文化庁および関係機関の施策を紹介してきました。今月号からは、表紙レイアウトを新しくするとともに、特集ページを増量し、文化庁が取り組んでいる施策紹介の充実を図っています。また、6月号からは二本の新連

◆連載◆
 「鑑」文化芸術へのいざない
 「二つのアカデミイ賞」
 「さいきょうミュージアム」美術館・博物館事業レポート
 徳川美術館
 「こどもの文化体験」
 「伝統の技」体験教室
 「文化交流使の活動報告」
 小休千寿・国原狼士
 「祭り歳時記 伝承をまえる人々」
 常陸大津のお船祭
 「どんなものかな著作権」
 著作権制度の概要

載を開始する予定としています。各美術館・博物館の企画展、常設展にちなむ作品・作者等についてわかりやすく解説する連載と、文化庁長官表彰、芸術祭賞、メディア芸術祭賞受賞者による寄稿を開始する予定です。読者の皆様にとって、よりわかりやく役に立つ情報をお届けすべくがんばっていますので、引き続きご愛顧くださいますようお願い申し上げます。（編集担当）

美術館・博物館チケットプレゼント

今月号の展覧会等へのチケットプレゼントは、
 A 京都国立近代美術館 2組（ペア）
 「京都学」
 B 国立国際美術館 2組（ペア）
 「杉本博司 歴史の歴史」
 C 国立新美術館 2組（ペア）
 「ルーヴル美術館展 美の宮殿の子どもたち」
 D 奈良文化財研究所 2組（ペア）
 「キトラ古墳壁画特別公開 一青龍白虎」
 です。ご希望の方はアンケートハガキのチケット応募欄に必要事項をご記入のうえ、4月23日（木）までにご投函ください（当日消印有効）。
 ＊チケット発送をもって当選発表にかえさせていただきます。

文化庁では、ホームページで、文化庁に関する情報を幅広く提供しています。ご意見、文化庁月報の感想などを、ホームページのご見欄へお寄せください。

●ホームページアドレス●
<http://www.bunka.go.jp>

文化庁月報 4月号（通巻487）

平成21年4月25日印刷・発行

編集——文化庁

〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2

発行——株式会社 きょうせい

本社 〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12
 本部 〒136-8575 東京都江東区新木場1-18-11
 電話 編集 03-6892-6536
 販売 03-6892-6666
 フリーコール 0120-953-431
 URL: <http://www.gyosei.co.jp>

印刷所——ぎょうせいデジタル株式会社

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価540円 本体514円 送料76円

年間購読料6,480円

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先
 （株）ぎょうせい営業部首都圏課（広告）
 電話03（6892）6588（ダイヤルイン）
 2009 Printed in Japan ISSN 0916-9849

本誌は本文に再生紙・大豆油インキを使用しております。